
機械化クロニクル(改題)

牧村沙夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械化クロニクル（改題）

【Nコード】

N7955W

【作者名】

牧村沙夜

【あらすじ】

西暦2111年。止まらぬ少子高齢化によって慢性的な労働力不足に陥っている国、日本。その首都である東京の300キロ東に造られた海上都市——？新東京？では、違法な技術によって生み出されたサイボーグ達による犯罪が頻発していた。その犯罪に対抗するため、法律の穴を掻い潜って生み出された4人のサイボーグによって結成された組織——？エレメンツ？。そのリーダーである、りんたんこと剣崎燐は今日も凶悪犯罪に立ち向かう！

プロローグ（前書き）

タイトル詐欺です。誤字脱字、または読み難いと思われる個所がありましたら、ご指摘お願いします。

ブローグ

西暦2111年。

止まらぬ少子高齢化によって慢性的な労働力不足に苦しんでいる国、日本。

その首都、東京から300キロ東に浮かぶ海上都市——？新東京？では、倫理的理由などから違法とされている新技術によって生み出されたサイボーグ達による凶悪な犯罪が頻繁していた。

その対応に苦しんだ？新東京？の統括理事会は、重大な病気を患ったものや、事故に巻き込まれ、生命の危機に陥った児童に限り、それらと同じ違法な新技術による治療・それに伴うサイボーグ化を行なってもよいとする、？緊急避難法？を可決した。

この法によつて命を救われた者達の中で、特別に精神的・肉体的適性を認められた者は、一切の治療費を免除される代わりに、統括理事会と直接契約を結び、その技術によつて得た力で、従来の警察では手に負えない犯罪者達の制圧・確保を任されるようになった――。

第一話（前書き）

ちよつと構成を変えました。

第一話

「はい、こちら第二特務機関？エレメンツ？。課長！？はい、はい、銀行強盗ですか？」

夜の繁華街——その高層ビルの最上階にある小さなオフィス。テレビ電話で受け答えをしている十代中頃程の少年——けんさきりん 剣崎燐。

どこか鋭さを感じさせる容貌に黒茶色の瞳＋黒い短髪。キツチリと着こなした、紺色の制服。

？緊急避難法案？通称？法の抜け穴？によって生み出された、違法な技術でサイボーグ化された少年少女によって結成された第二特務機関？エレメンツ？のリーダー。コードネームは？火？。

その能力——両腕の有機義手に搭載された電磁カタパルトによるワイヤー射出と、それによる卓越したクライミング能力。腕一本でどんな壁でも登り詰める？クライマー？。

「そんなコトに我々？エレメンツ？が出勤しても——はい、はい、我々の実力を試すデモンストレーションというわけですか。分かりました。直ちに現場に急行します」

電話を切る。顔を上げる。

オフィスの向こうで、二人の少女——あさぎりこのは 朝霧木葉としちめいるり 不知火瑠璃——が壁一面に取り付けられた巨大な？貼り付け型？テレビで弾幕ゲームに興じていた。

画面全体を塗り潰すような馬鹿げた弾幕。それを躲し切れずに敗北した少女——朝霧が振り返った。

気の強そうな容貌に栗色の瞳＋黒茶色のポニーテール。剣崎と同じ紺色の制服を、こちらはややラフに着崩している。スレンダー体型。

剣崎と同じ？エレメンツ？の初期メンバーで、剣崎とは十年来の幼馴染。

その能力——身体のおちこちに移植された人工筋肉による超速駆

動。数メートル先で放たれた弾丸すらも躲す？インファイター？。

コードネーム？風？。

「やつと初任務？燐」

「ああ。ちよつと意外な形だが」

「銀行強盗ね。それくらい警察だけで解決出来ないの？」

「まあまあそう言うな。犯人は俺達と同じ、違法な技術で造られたサイボーク集団らしいからな」

「へー、それは面倒だね」

その声とともに、ゲームに勝利した方の少女、不知火が立ち上がった。

中性的であどけない容貌に蒼い瞳＋金色のショートカット。少し暑いのか紺色の制服は脱いで後ろのハンガーに掛けてあり、白いYシャツを身に纏っている。スレンダー体型を超えたスレンダー体型
〓貧乳。

同じく？エレメンツ？の一員。追加メンバー。

その能力——両腕に移植された振動補正機構と全地球測位機構によるスコープ要らずの精密射撃。数キロ先のコインすら百発百中の？スナイパー？。コードネーム？土？。

「やつとボクの出番か」

「随分楽しそうだな？」

「そりゃそーだよ。もう退屈な訓練には飽き飽きしてたからね」

「それは頼もしいな」

「隊長。目的地の解析は終わりましたが」背後からの、事務的な声。凄まじいスピードでテーブル上の超極薄パソコンを叩いている、

4人目の少女——涼月翡翠。すずつきひすい

子どもっぽい顔＋灰色の瞳＋銀色のセミロング。剣崎と同じ紺色の制服をややタイトに——厳密には胸がつかえているだけ——着こなしている。ロリ巨乳。

やはり？エレメンツ？の一員で、メンバーの中では最も新人。

その能力——脳の演算機能の一部を外部のコンピュータとリンク

することで得られた、コンピュータプログラムを感覚的に読み取る能力。自身がどんなウイルスよりも凶悪な？ハッカー？。コードネーム？水？。

「じゃあ、行くとするか」

4人は各々自分の装備をチェックすると、オフィス内に設置されている開閉ボタンすら無いエレベーターに乗り込んだ。

そしてエレベーターが下降している間に、4人は指紋・網膜などの厳重なセキュリティチェックをパスし、そのエレベーターを降りると、このビルの表向きの施設である、とある有名量販店の従業員室に偽装された部屋に出た。

その従業員室の裏口を開け、比較的人通りの少ない裏通りに出る4人。

「全く、ここから走って行けってのか？」

先程の電話で示された場所である、とある大型銀行までの遠さにボヤク剣崎。

「別に、私は走って行っても良いんだけど」靴紐を結び直す朝霧。

100mを5秒未満で走り切る朝霧の圧倒的脚力を考えれば、数キロ先の銀行と言えども数分で到達は可能であろうが、ここは人通りの多い繁華街である。

「止めとけって。それじゃどれだけ怪我人が出るか分からない。ここは普通に、タクシーでも使って行くか」

「いえ、先程の通信先——つまり課長の通信記録をハッキングしたところ、どうやら課長自ら私達を迎えに来ているようです」

そう言うのは、先程から最新式の多重折り畳み携帯コンパクトフォンを操作している涼月。

「へえ、あの課長が自らねえ」

「あ、アレじゃない？」

その声と共に、突然一つの方向を指差した不知火。

剣崎はその方向に目を遣ったが、高層ビルの壁以外何も見えない。地球測位機構によって衛星の情報をダイレクトに得られる不知火

にとって、本来見えない場所を観測する精度は常人が直視する場合のそれを遥かに上回るのだが、最近その能力を身に付けたばかりの涼月は、その異常な視点と普通の視点の違いを上手く切り替えられないのである。もつとも、数ヶ月前と比べると随分マシになっているが。

「……すまない。俺達には全く見えない」

「ああそつか、ごめんごめん。じゃあ、皆ボクについてきて」

不知火を先頭に、大通りに向かって走る。大通り。さらに大勢の歩行者が歩いている歩道をつつ切る。駐禁エリア。そのド真ん中。

見覚えのある赤いスポーツカーが、白昼堂々そこに駐車していた。

「おう、お前ら。早く乗れよ」

近寄ってきた4人に声を掛けたのは、黒いスーツに身を包み、黒髪をおかっぱ風に切り揃えた妙齡の女性。ただしその顔は白い仮面で隠されており、その表情は一切窺うことが出来ない。

その女性の経歴は謎に満ちており、かつて涼月は三日三晩にわたって彼女について調べたことがあったらしいが、彼女に関するデータは一切見つからなかったそうである。

また、剣崎が初めて彼女に会ったとき、本人に名前を伺うと、？ シークレットな課長？とはぐらかされたため、以降剣崎は彼女のことをただ？課長？と呼んでいる。

そして剣崎はその車の助手席に、他の三人は後部座席にそれぞれ乗り込んだ。

「で、課長。今回の指示は――」

「ああ、今回お前達に細かい指示は出さないから、お前達4人の力だけで何とかしろ」

投げやりに、それでいて楽しげに命令する課長。いきなり車を急発進させる。

「涼月、敵の戦力は？」シートに押し付けられながら、さっそく作戦会議を始める剣崎。猶予は現地に到着するまでの数分のみ。

「まず銀行正面に大型の？機械獣？一体と、逃走用と思われる特殊

装甲車が一台。そしてその両ドライバーの2名。そして銀行内部に、おそらくサイボーグと思われる武装集団が5名。なお、その内一人は奥の部屋で人質を監視しているようです」いつの間にか銀行内のカメラをハッキングした涼月。ノート大に広げられた多重折り畳み携帯（コンパクトフォン）に映し出される銀行強盗達。

「不知火、この奥にいるヤツを相手に気付かれずに狙撃出来るか？」最大のリスク——一般人の犠牲——の排除を第一に優先。

「うーん、それはちよつと無理かも。正面に立てば出来なくもないけど、その前に絶対バレちゃうよ」

残念そうに首を振る不知火。

多重折り畳み携帯（コンパクトフォン）に映し出される銀行強盗達の様子を見ながら思考——問題の1人は他の4人から少し離れている——人質が閉じ込められた奥の部屋——その手前の階段——防犯用シャッターの存在。剣崎の脳内で答えが導き出される。ちよつどその瞬間、車が現場に到着。剣崎は三人それぞれに指示を出した。

「涼月はここで無線機を使って全員のバックアップ。俺は上の階から突入し、一番奥にいるヤツを強襲。朝霧と不知火はタイミングを見計らって正面の敵を撃破し、その後中に突入してくれ。少々遅れても問題は無いから、絶対に先行しないように」

「了解ッ！」通常の材木切断用チェンソーを数倍に拡大したような形状の、対機械兵特化型チェンソーを構える朝霧。

「了解」狙撃用スコープを取り外した消音自動式ライフルを手に取る不知火。

「了解です」？エレメンツ？専用の無線機を取り出す涼月。他の3人の耳に付けているそれと回線が繋がっているか確認する。

「では、先に行く」

車を降り、銀行強盗達の死角から両腕のカタパルトからワイヤーを射出——ハーケンがビルの壁に突き刺さる——ワイヤーを引き戻そうとする力で跳躍し、空中で反転すると、壁に突き刺さったハー

ケンを掴み、2階の壁に着地。そして高電熱ナイフで窓ガラスを溶かして穴を開け、その穴に手を伸ばして鍵を開けると、中へ潜入した。

それを見た朝霧と不知火は、車を出て各々適当なポジションを取り、涼月による突入の合図を待ち始めた。

「ふむ、まあそうなるか。後は見てのお楽しみだな」

コンバクトフォン

課長は車のシートを倒して寝転がりながら、多重折り畳み携帯の画面と無線機の音声に細心の神経を払っている涼月の顔を見て、仮面を着けていてもハッキリ分かる程の笑みを浮かべた。

第二話（前書き）

まさかの二話目です。相変わらず文章がハチャメチャなのでご指摘
お願いします。

第二話

剣崎は人っ子一人いないビルの二階を足早に、そして音も無く走る。

万が一にも強盗達に発見され、最悪の事態にならないように。

そして一分も経たない内に、人質のいる奥の部屋——その手前の廊下に設置された非常階段の、一階と二階の間にある踊り場へと到着する。

《予定のポイントに到着した。連中の動きに、何か変わったところはないか？》

無線を使い、打ち合わせの最終確認。答えが返ってくる前に両腕のカタパルトから放たれるワイヤーに取り付けられたハーケンを取り外し、代わりに錘を取り付ける。

《今のところ、特に問題はありません》あくまで事務的な声で返す涼月。

《じゃあ、今から決行する》

そして剣崎は無線を切ると、一足跳びで非常階段を飛び降り、そのまま人質の近くで銃を構えていた男を狙って右腕のワイヤーを射出した。

「なっ!？」

男は咄嗟に顔を左に振って躲す——左に外れる錘——右腕を引き戻す剣崎——そのまま右に半回転。男の首にワイヤーが何重にも巻き付く。

「しまっ——」

男が声を上げる前に、剣崎は一瞬で男の懷に飛び込んで胸元にタツクル——男に首を掴まれる——男の腹部に高電熱ナイフを押し当てる。バチバチッ、という肉が焦げる音とともに、男は激痛によるショックで失神し、その場にガクツと崩れ落ちた。

（やはり腐ってもサイボーグ。単なる打撃だけでは効果は薄いな。

まあ、合わせ技ならば問題は無さそうだが)

「警察^{サツ}かッ!？」

異変を嗅ぎ付け、拳銃を構えて剣崎の方へ走ってくる3人の男と、その後ろからついて来る手ぶらの男——おそらく接近戦タイプのサイボーグ。

剣崎はその全てを無視し、左腕のワイヤーを射出。

凄まじい勢いで放たれた錘は、近くの壁に設置されていた防犯用シャッターを作動させるボタンをぶち抜いた。

そして再びワイヤーを装着し終えた剣崎の下に男達がやって来ると同時に、防犯用シャッターが床に下り切る。人質の安全を確保。男達のアドバンテージが消失。

「おのれエ……殺セッ! 殺セエエエエッ!」

3人が放つ銃弾の嵐を、剣崎は側転、前転、前転の連続技で潜り抜け、受付の机を乗り越えて身を屈めた。

《涼月、もういいぞ》机越しに迫りくる4人の様子を探りながら、涼月に通信する剣崎。

《分かっています!》彼女には珍しく、感情の籠った声の涼月。

《では、突撃してください》涼月からの通信。

《よっしゃあアアアアッ!》朝霧の返答。

その通信とほぼ同時に、銀行内部から響き始めた無数の発砲音を聞き、朝霧は大型?機械獣?と特殊装甲車に向かって全速力で突撃した。

その動物界トップクラスの生物にも匹敵する程の脚力は、相手との距離をみるみる縮めていく。

勿論、相手もただ黙っているわけではない。

「バカなヤツめ——ぐあッ!？」

特殊装甲車から身を乗り出して銃を構えた男の額に、どこからと

もなく放たれた硬質ゴム弾が命中した。

「バ、バカな……一体どこから……」

額を撃たれた男は特殊装甲車から道路に転がり落ち、よろめきながらも銃を構えたが、再び額を撃ち抜かれ、さらに道路を転がっていく。

「み、見えない、何も見えない」額の皮膚が破れ、顔面を血で染める男。

そして再度額を撃ち抜かれたところで、男は口から泡を吹き、その場で気絶した。

「三度目の正直、か。額に三発も当てないと気絶しないなんて……やっぱり実戦と訓練は違うなあ」

ボヤキながらライフルの弾を装填する不知火「男を狙っていた？ スナイパー？。」

そもそも？ 全地球測位機構？ によつて壁の向こう側すらも正確に認識することができ、その上？ 振動補正機構？ によつて手ブレを最小限に抑えることが可能な不知火にとつて、銃の中でも特に優れた直進性を持つライフルなど、わざわざ構える必要はない。ただ物陰に隠れ、そこから銃口を伸ばして撃てばいいだけである。

今回の場合も、近くに停められていた車の陰に隠れ、その車の下にライフルを突っ込んで撃つただけだった。

「ひーちゃん。今度からはボク、対戦車ライフルを使ってもいいかな？」 不知火の提案。

《予算の無駄です》その提案を、即座に切り捨てる涼月。

そして銀行外部に残された最後の敵戦力「大型のヒト型？ 機械獣？ と向かい合う朝霧。両手に持った？ 対機械兵特化型チェンソー？——通称？ 鎖鋸？ が唸りを上げている。

「クソッ！ 何だお前ら……まさか、サイボーグかつ！？」

中に乗っているパイロットの苛立った声。

「まあね。？新東京？唯一のサイボーグ部隊、第二特務機関？エレメンツ？。よく覚えておきなさい！」

凶悪な笑みを浮かべながら、名乗りを上げる朝霧。

「舐めるなアアアアッ！！」

鋼の塊とでも言うべき？機械獣？の拳が、朝霧に向かって振り下ろされた。

「ふっ！」

朝霧は道路を蹴って跳躍してすんなり躲したが、その一撃は朝霧が一瞬前まで立っていた場所を瓦礫に変えた。

「つとと、危ない危な——」着地が乱れる朝霧。？鎖鋸？を構え直す。

《退いて下さい！》涼月からの緊急コール。

「もう、何なのよーッ！？」

その声に反応して、朝霧が咄嗟にバックステップで距離を取った瞬間、？機械獣？の周りで火花が飛び散った。不知火の狙撃。

「どうせ効かないでしょ！？私の手柄を横取りするなー！」

大声で怒鳴る朝霧。しかし迂闊には動けないため、足が止まってしまう。

《不知火さん、今すぐ発砲を止めなさい！朝霧さんが動けないでしよう！》声が悲鳴に変わった涼月。

《大丈夫。関節部に連続で当てれば……》涼月からの指示を無視し、なおも狙撃を続ける不知火。

《ちよっと！一体どうなってるの！？》回線に割り込む朝霧。

？機械獣？のパイロットは相次ぐ銃撃から謎の狙撃手——不知火——のおおよその位置を掴み、動けない朝霧を尻目に方向転換した。

(……これは酷いな)

敵の逃走経路を塞ぎつつ、包囲される危険性を抑えるために地下の駐車場に下り、駐車されている自動車の間を走りながら、通信回線上で起こっているゴタゴタに頭を抱える剣崎。

（……ヘタに会話に加わるのは止めておこう。それよりもまず——）

剣崎は通信を切ると、左腕のワイヤーを射出。駐車場の天井付近に伸びている梁に引っかけ、駐車されていた車を蹴って跳躍——反転——梁の上に着地。

そして腰のポーチからジューズ缶のような形をした閃光手榴弾を右手で一つ取り出し、脇についているレバーを握ったまま、先端についていたピンを口で引き抜いた。

《すいません！しばらくの間援護に回れませ——》涼月からの通信叫び声。

《問題な……くッ！？》返答しつつ、男達の放った銃弾から身を隠す剣崎。鋼鉄の梁に次々と銃弾が命中する。

《隊長！？大丈夫で——！？》その音に悲鳴を上げる涼月。最初の冷静さはすっかり吹き飛んでいる。

《問題ない》最後まで言わず、通信を切る剣崎。

そして銃撃が止んだ一瞬の隙を見計らって、コンパクトなフォームで閃光手榴弾を投擲。空中で、脇についていたレバーが弾け飛んだ。

それは銃を構えていた男達の中心に落ち、金属音を立てて道路を転がる。

そして剣崎が目を閉じて下を向き、耳を塞いだ瞬間、それは爆発した。

猛烈な音——爆風——それと同時に発せられた絶大な閃光が辺りを照らす。

「く……そ……」

その凄まじい光と音で、一時的に視覚・聴覚の機能を失った男達。その男達の一人を。

「ぐはっ！？」

左手のワイヤーを使って梁から降下してきた剣崎の蹴りが襲う。重力の力で加速したその一撃は、男を近くに停まっていた車のボンネット上まで吹き飛ばした。

男を蹴った勢いで着地の勢いを殺した剣崎は、続けざまに右太腿のポーチから高電熱ナイフを抜き、近くにいた男から順番に襲い掛かる。

耳を抑えている男の義足——失神している男の義手。相手の肉体と機械部位——その継ぎ目を正確に狙い、鋭さ+熱で切断する剣崎。一瞬の早業で三人を仕留めた剣崎だったが、4人目の男——接近戦タイプのサイボーグ——がどこにも見当たらない。

《後ろですッ!》

その声に反応して振り向くと、車の陰から飛び出してきた長髪の男が、光る棒のような形状の物を振りかぶっていた。

剣崎は咄嗟にその一撃を高電熱ナイフで受けたが、それを握っていた右腕に強烈な電流が流れ、ナイフを床に落としてしまった。

「グッ!?!」

剣崎は右手を押さえながら、長髪の男が放つ続けざまの連撃を、後ろへ下がりがりつつ二度、三度と回避。そして大振りで放たれた一撃の隙を突き、左手で左太腿のポーチからもう片方の高電熱ナイフを取り出し、顔面を狙う。

首を振ってその一撃を避け、続けて放った回し蹴りを後ろに跳んで躲すと、男はさらに追撃せんと迫り来る。

おそらく違法改造された電撃式警棒スタンロッドの電流が右腕に流れ込んできたのだろうと推測した剣崎は、右腕のワイヤーを射出。男がその棒で受け止める一瞬前に、左手の高電熱ナイフでワイヤーを切り離し、感電による相手の自爆を誘う。

「良い判断、と言いたいところですが」

電撃式警棒スタンロッドに巻き付き、大量の電気が流れているワイヤーが身体に巻き付いたにもかかわらず、男は平然としている。

「残念ながら、これはただの警棒ですよ」

強烈な電流によって赤黒く腫れている右手を押さえる剣崎。確かにこれほどの高圧電流を備えた電撃式警棒など、いくら改造しようが有り得ない。つまり相手の正体は、スタンロット発電能力者のサイボーグ。
「統括理事会もサイボーグ部隊を結成したんですか、それは知りませんでした。こちらの雇い主は貴方達にほとんど倒されてしまったようですが、まあ、こんな不測の事態が^{イレギュラー}あつては仕方ありませんね」
チチチ、と近づけた両手の間に電流を走らせる長髪の男。
「しかしこのままでは、護衛を請け負った私達の名前にも傷が付いてしまいます。というわけで、貴方だけでも死んでもらいましょうか！」

「危なっ！」

不知火が身を隠していた車から離れた瞬間、車がペシャンコに潰れた。

その原因であるヒト型？機械獣？は車の上に立つと、不知火を踏み潰そうと跳んだ。

不知火はライフルを構えたままバック転で躲すと、足の関節を狙って撃った。狙った通りの場所で金属音と共に火花が飛び散るが、その動きは止まらない。

そして遂に？機械獣？の右フックが不知火の身体を捕えた。

「げほっ！？」

胴体を打ち抜かれた不知火は大きく吹き飛ばされ、ガードレールに直撃した。

「か……はっ！？」

内蔵のどこかを痛めたのか、不知火の口に血がせり上がってきた。不知火はそれを道路に吐き捨てると、落としたライフルを構えた。

「だから無駄だって」パイロットの嘲る声。

「舐めるなアアアッ！」

そう叫ぶと、朝霧はチェインソーでその？機械獣？に斬りかかるが、チェインソーの刃と同じ多層炭素繊維でコーティングされたボディはチェインソーの刃を全く通さない。

「クッ……硬い……」

思わず舌打ちをした朝霧に、涼月からの緊急コール。

《早く地下の駐車場につ！》

右腕のワイヤーとナイフを一本失い、迂闊に警棒や拳を受け止められない剣崎は、長髪の男の攻撃を躲すだけで手一杯になっていた。「どうしました！逃げてばかりでは私には勝てませんよ！」

長髪の男のハイキック＋電撃。剣崎は身体を反らせて回避すると、その勢いでバック転し、長髪の男から距離を取る。そして再び天井付近の梁に向かって左腕のワイヤーを射出し、鉄柱を蹴って跳躍。そして空中で反転し、着地。長髪の男が来られないであろう高さまで逃げる。

「なるほど、見事なものです。しかし」

そう言つと、長髪の男は鉄柱に向かって凄まじい勢いで走り込み、「その程度の高さ、私が登れないとでも？」

その勢いのまま鉄柱を垂直に走ると、剣崎の乗っていた梁に向かって跳んで来た。

「この程度なら、電磁力を使えば登れるんですよえ！」

梁からワイヤーを外し、慌てて飛び降りた剣崎の真上で、長髪の男の電撃による火花が大量に飛び散った。その衝撃で受け身を失敗し、背中から落ちる剣崎。

「では、さらばです！」

頭上から降ってくる長髪の男。大量の電気を両足に纏わせた、必殺の一撃。

その瞬間。

突然駐車場の天井が崩れ、瓦礫と共に二人の少女とヒト型？機械獣？が降って来た。

「何ッ！？」

思わぬ事態に空中で体勢を崩した長髪の男の顔面を、剣崎は仰向けのまま蹴った。長髪の男はそれを躲し切れずに直撃し、道路に転がって鼻から血を吹き出した。

「倒せないなら、倒す必要が無い状態に持ち込めばいいってことでしょ？」

高い位置から落ちて故障してしまったのか、その場から動けないでいるヒト型？機械獣？を見下ろす朝霧。

「馬鹿な……道路をぶち抜いたというのか！？」

「別に出来なくはないでしょ。アンタだって道路をバリバリ剥がしてたんだし」

「でも、機能停止したのはボクのおかげじゃない？最後の方はオイルが漏れてきてたしね」

驚愕するパイロットと、なおも言い合う朝霧と不知火。

《隊長！無事ですか！？》涼月からの通信。

その様子を見て、長髪の男は頭をガシガシと掻き、溜め息を吐いた。「援軍、という訳ですか。仕方ありません。それでは私も、そろそろ失礼させていただきましようか」

チチチ、と再び電流を纏った長髪の男は、崩れた鉄骨を次々に跳び移り、先程朝霧が開けた穴を通って地上に登った。

「では、この続きはまた今度、ということだ」

そう言い残すと、長髪の男は夜の闇に消えて行った。

第三話（前書き）

今回は涼月パートです。だんだん文体も固まってきた気がしてきました。誤字脱字の指摘や感想はぜひともお願いします。

第三話

「で、お前達、何を言われるのか分かってるんだろうな？」

後片付けは警察に任せ、オフィスに戻った4人に詰め寄る、仮面の課長。

「ぜんっぜん、分からないんですけど」ふて腐れている朝霧。

「ボクも」割とどうでも良さそうな不知火。

「すいませんでした」とりあえず謝ったという感じの涼月。

「……」怪我の手当てをしながら、明後日の方向を向いて考え事をしている剣崎。

そんな4人を見て、頭を抱える仮面の課長。

「……まずは朝霧。まあ最終的に道路を抜いて捕まえる、という判断は悪くなかった。が、遅過ぎだ。もう少し臨機応変にな」

「ハイハイ、分かりましたー」

「次に不知火。まあ最初からオイル漏れ狙いで一点射撃をしていたのは分かる。しかし、他のメンバーに何故そう言わない？火力不足なのは自分でも分かっていただろう？」

「……ボクは、あまり他人を信用出来ないんで」

「任務に私情を持ち込むな。一応この3人くらいは信用してやれ」

「……はい」

「次に涼月。流石に自分でも分かるな？」

「テンパリ過ぎ、ですね」

「ああ。もう少し落ち着け。あんな言い方じゃ他の3人も聞く気にならん」

「……分かりました」

「そして剣崎。誰も援護に行かなかったのも問題だが、ワンマンプレイは控えろ。無理そうな相手だと思ったら、素直に引け」

「……すいません」

「では、お前と涼月は残って犯人グループのバックを可能な限り絞

り込んでおけ。他の二人は明朝まで自由にしてよし」

そして深夜。デスクの上に大型のノートパソコンを二台開き、警察から送られたデータや現場で得られたデータを基に、犯人グループと、そのバックの情報を探っている最中に、涼月が口火を切った。「ごめん。私のせいで、課長から」

剣崎と二人きりの時は、基本的に敬語を使わない涼月。率直に謝る。「いや、確かにこの男を深追いしたのは、俺のミスだ」

剣崎は涼月のこういうところは好ましいなと思いながら、銀行内の監視カメラが捉えていた長髪の男をディスプレイに映した。

「その男だけど、警察から送られてきた犯人グループの証言からすると、どうやら用心棒として雇われていた男みたい。何人かのエージェントを通しているみたいで、映像からも色々調べてみたけど、全く情報が出て来ない」

「そうだったのか。どうも一人だけ、纏っている空気が違うと思った」

「しかし、私がこれだけ探しても何も出ないなんて、課長以外の人では初めて」

「つまり、統括理事会直属部隊の指揮官と同等以上のセキュリティで守られたサイボーグの用心棒か……何か匂うな」

「……統括理事会か、それに匹敵するような権限を持つ誰かが、秘密裏に自前のサイボーグ兵を抱えている可能性があるってこと？」

「俺の勘だけだな。だが、名目上初となるサイボーグ部隊が設立された裏で、統括理事会内での勢力争いが絡んでいる可能性はあるだろう」

「しかし、どうしてそんな権力を持っている人が、たかだか銀行強盗を起こす程度の犯罪グループの支援を？」

「権力と財力は必ずしも一致するとは限らないし、それこそ初任務

で浮足立っていた俺達を、一気に全滅させようとしていた可能性だ
つてある」

「……なるほど。確かに結果的には犯人グループを全員捕縛出来た
けど、そう言われてみると不自然な位、彼らの装備は私達と相性が
悪かったような気がする。特に？機械獣？に用いられていた、多層
オルナノチューブ
炭素繊維によるコーティング技術なんて、まだ宇宙開発の分野でし
か用いられていない最先端技術だし」

「ああ。これを必然と捉えるのは早計だとは思うが、裏を返せば今
回の犯人グループのバックは、そういった宇宙開発の分野に携わっ
ている者なのかもしれない。だが、まだこれといった人物は浮かび
上がってこないな」

「確かに。それなりの権限を持ち、正規のサイボーグ部隊という存
在が邪魔で、なおかつ宇宙開発に携わっている人間。この条件に当
て嵌まる人間は、今確認できるだけでも20人ってトコね。現段階
でここからさらに絞り込みを掛けるのは、ちょっと無理かも」

涼月はそう言うと、その三つの条件に当て嵌まるらしい20人を
リストアップしたデータを剣崎に見せてきた。

「……流石に早いな」若干引く剣崎と、

「悪いけど、単純な情報処理能力では誰にも負ける気はしない」キ
メ顔の涼月。

それを見た剣崎は、軽く伸びをして椅子にもたれ掛かると、窓に
映る夜景を眺めて言った。

「1と0の世界を感覚的に読み取る能力、か。多分俺の見える世
界と、涼月ちゃんの見えてる世界は違うんだろうな」

「別に、この能力が使えるのは電脳ネットワークに関わることで
それにもしも私が今、完全に周りの電波を遮断されたら、右も左も
分からなくなるしね」

涼月は同じく夜景を眺めながら、自嘲するような感じで呟いた。

「まあ、電脳技術の小型化が進めば、その問題は何とかなるんだろ
う？」

剣崎は涼月の放つ重い空気を読み取ったのか、あえて軽く返した。
「……でも、それじゃあ根本的な解決にはならないしね。やっぱり私は、そのうち普通の身体に戻りたいかな。剣崎君だって、そう思うでしょ？」

同意の要求——それを肯定——あるいは同調してしまいたい自分。そんな弱くて残酷な自分を認識しながら、剣崎はただ正直に返した。
「……俺は、涼月ちゃん程元々の自分との齟齬は感じないからな。何とも言えない」

沈黙——非難——現実の認識。あえて正直に答えてもらったことに感謝しつつ、涼月の中に黒い欲望が込み上げてくる。

「まあ、そうだよな。ごめんね、変なこと言つて」その欲望を隠して返す涼月。

「いや、こつちこそ分かつてやれなくて悪い。じゃあ、課長から言われたことも終わったことだし、そろそろ俺達も寝よう」

涼月の変化には気づいていない剣崎。黒い欲望が、その形を成す。
「……ごめん。あともうちよつとだけ調べたいことがあるから、先に休んでて」

嘘——ある意味では真実。剣崎にそれを認識することは出来ない。
「分かった。夜更かしは程々にな」

剣崎はそう言うと、オフィスに用意されているベット・シャワー付きの個室に入っていた。

「……自分との齟齬、か。そういえば？エレメンツ？の個人情報ハッキングしたことは今までなかったな。ちよつと調べてみよう」
それを見送った涼月はそう言うと、再びパソコンに目を戻した。

第四話（前書き）

最近ペースが遅いですね……もう少し早めに更新できるように頑張ります。

第四話

翌朝。

剣崎の個室に設置されている、四角い形をした金属製の目覚まし時計が鳴り始めた。

剣崎は布団の中から手を伸ばし、ジリリリリ、と音を立てて朝を告げる目覚まし時計の上部をぶっ叩いてアラームを止めると、ベッドからゆっくりと起き上がった。

そのままフラフラと歩き、個室に設置されているシャワー付きの洗面場に行くと、蛇口を捻って水を出し、その水で顔をザッと洗った。そして剣崎は顔を洗った後、電動歯ブラシを使って歯を磨いていると、壁の向こう側から大きな目覚まし音が流れて来た。

オフィス内で銃火器の射撃訓練も行う都合上（公の場で使用許可を得ているのは涼月だけだが）、それなりに防音対策は取られているにもかかわらず、それなりの音量で流れて来たということから、その部屋の中ではかなりの大音量で鳴り響いていることが容易に推測された。

その音はすぐに鳴り止んだが、壁の向こうで誰かが起きたという気配は無い。

剣崎は歯磨きを終え、手早くパジャマを脱いでハンガーに掛け、白いワイシャツの上に紺色の制服を着てオフィスに出ると、メンバーの中で一番早く起きていた不知火が、オフィスのテレビで昨日と同じ弾幕ゲームに興じていた。

率直に言って、二人で対戦するならまだしも、一人でそんなゲームをやって何が楽しいのか、ほとんどゲームをしない剣崎にはよく分からないのだが、不知火がノリノリで操る飛行機のような物体がテレビの大画面の中を凄まじいスピードで上下左右に飛び回り、まるで滝のような弾幕を紙一重で躲していた。

剣崎はそれを呆れつつも感心しながら、少しの間無言で見続けた。

「よつし、これでハイスコアこうしーん——って、燐君おはよー」
そのゲームが一段落したのか、不知火は剣崎の方を向いて声を掛けてきた。

「おはよ。そのゲーム、実は新手の射撃訓練かなんかなの？」

他の二人もやっていたことから、なぜ自分は何も聞かされないのか、ということを取りあえず棚上げしつつ、これくらいしか有り得ないんじゃないか、という非合理的な推測を行い、剣崎は一つの答えを導き出した。

「これ？これは普通のゲームだよ？燐君も一回やってみる？」

その推理——もとい当てずっぽうを一瞬で崩され、若干気を落とす剣崎。

「いや……。よくそんなの避けられるな？」

恥を搔かないようにやんわりと断りつつ、そのゲームの話題を不知火に振った。

「まあ、他の人より私は数段細かい動きが出来るしねー。でも、こーちゃんもひーちゃんも私と同じくらい上手いんだよ？」

剣崎は？エレメンツ？のメンバー内でさりげなくハブられてるんじゃないか、という疑問を抱きつつ、そのネタでもう一度だけ話を引く張った。

「……ってことは木葉は超反応で無理矢理、涼月はデータ予測で躲してるのかな？じゃあ別に肉体を特化してない俺がやってもしょうがないな」

「そりゃそーだね。まあ、3人の中ではボクが一番上手いんだけどね」

「そうなんだ。ところで、さっき大音量で目覚ましを鳴らしていたのはどっち？」

そして話を一区切りさせたところで、剣崎は本題に入った。

というのも、どちらの目覚ましが鳴ったかどうかで、これから剣崎が取るべき行動が大きく変わるからである。

「多分こーちゃんじゃないかな。方向的に」

「……やっぱりな。ちょっと起こしてくるか」

目覚ましで起きられなかったら起こしに来るようにと頼んでくるにもかかわらず、起こすことは非常に困難を極める悪魔的寝坊助――朝霧。

当然他の二人にそれを任せることは出来ないため、これは基本的に剣崎の仕事となっている（例外的に早朝に任務が入った時、課長自ら起こしに行くことがある）。

「じゃあ、ボクもひーちゃんを起こして来ようか？」

面倒事は任せた、という感じの口ぶり。

「昨日一番遅くまで色々調べてたからな。ギリギリまで寝かしてあげよう」

「そうだねー。ってか、ボク達の方が先に休んだのに、こーちゃん……」

「どうせ遅くまでテレビでも見てたんだろう。いつものことだ」

剣崎はそう言うと、不知火の同情するような視線を背中に受けて、自分の個室へと続くドアの隣に設置された朝霧の個室のドアをノックした。

当然――いつものように反応は無く、剣崎はその無反応さに対して僅かに溜め息を漏らした。

そしてドアノブに手を触れると、ドアノブに付けられているセンサーが反応し、ドアに掛けられていた鍵が解除された。

ちなみにこのドアを開けられる者は朝霧本人を除くと、課長を含めて誰もいないため（マスターキーの使用には書類手続きが必要なので面倒）、実際問題剣崎以外は誰も一人で起こしに行くことすら出来ない。

また？エレメンツ？内でも剣崎と涼月は？エレメンツ？のメンバー＋課長の指紋を登録しているが、不知火に至っては自分以外誰も登録していないなど（もつとも不知火は？エレメンツ？の中で最も早起きのため、特に問題になったことはないが）、メンバー内の考え方が割と喰い違っているのはどうなんだ、と剣崎は一人思った。

そしてドアノブを回してドアを開けると、剣崎は朝霧の部屋の中に入った。

無造作に脱ぎ捨てられた制服と、部屋に置かれた乾燥機付き自動洗濯機から取り出されただけだと思われる、クシャクシャのまま部屋の片隅に置かれている下着。

そしてその奥にあるベットで横たわる、布団を被った肉塊。

流石にいきなり布団をひっくり返して起こすのは色々な意味で危ないので、まずは朝霧の耳元で声を掛けた。

第五話（前書き）

さっそく一日遅れるという失態を晒してしまいました。このままでは年内に一区切りつくのかどうか非常に怪しいです。

第五話

「木葉。起きろ、起きろ、起きろー」

その声を聞いた朝霧は、突然枕を手に取って声の発信源——剣崎に向かって投げつけてきた。人工筋肉によって常人を遙かに超えた筋力で——もちろん起きたてなのでそれほどでもないが——放たれた枕が剣崎の顔面を襲った。

「うおッ!？」

剣崎は咄嗟に仰け反り、砲弾のごとく飛んできた枕を間一髪で躲した。そして剣崎の頭上を越えていった枕は、そのまま一直線に飛んで白い天井に激突し、派手な音を立てて床に落ちた。

その振動で部屋全体が僅かに揺れ、明かりに付着していた埃が舞い散り、カーテンの隙間から僅かに差し込む朝日を反射してキラキラと光った。

そして枕を投げた当の本人である朝霧は、まるで何事も無かったかのように、再び布団の中でウニャウニャと蠢き始めた。

(これ、課長の仮面に当たって外れたら面白いんだけどな……)

天井に新しく作られた凹みと、床に落ちた枕を見て、そんなくらないことを考えながら、剣崎は再び朝霧の耳元でもう一度ゆっくりと声を掛けた。

「もうとつくに目覚まし鳴ってるぞ?」

それを聞いた朝霧は剣崎の方を向いて僅かに目を開け、だらしなく弛んだ口を開いた。

「うん……あと五分だけ……」

そう言って再び瞼を閉じた朝霧を見て、剣崎は溜め息を吐いた。

「……五分だな? まあ涼月も起こしてないし、別にいいか」

「……やっぱり起きる」

何かスイッチが入ったのか、朝霧は突然目を開けて上半身を起こし、ゆっくりと立ち上がった。しかしまだ本当に眠いのか、フラフ

ラとしている朝霧を見かねた剣崎が手を貸そうとすると、朝霧は素直に手を取ったが、すぐにやんわりと離れた。

「ああ……大丈夫大丈夫。もう、一人で立てるから」

「……そうだな。悪い」

二人の間の空気が若干重くなったところで、オフィスに設置されているテレビ電話が鳴り出した。オフィスにいた不知火がすぐに取り、少し会話すると剣崎を呼んだ。

「隣くん、課長から電話だから来てー」

「分かった。今行く」

剣崎は完全に目が覚めた朝霧をその場に残し、急いでオフィスに戻った。

中央のデスクに置かれているテレビ電話の正面に置かれた椅子に座っている不知火と、その画面の中で、いつものように仮面で表情を隠している課長。

課長、というよりも得体の知れない人間と話すのが苦手な不知火は剣崎が来たのを見ると助かったような顔をして、剣崎に席を譲った。《では剣崎。昨日命令したことはやってくれたかな？》

剣崎が椅子に着き、不知火がその後ろに立ったところで、テレビ画面から課長の声が流れてきた。直接会っている状態なら不知火も問題なく話せるのだが――一歩引いて考えてみれば、確かに不気味である。

剣崎は電源が入りっぱなしになっているノートパソコンのスリープ状態を解除すると、昨日作った容疑者リストのファイルを開いた。そのファイルの最終保存時間を見ると、涼月は剣崎が休んでから1時間以上も調べていたようだったが、特に内容の変化は見られなかった。

「はい。昨日警察から送られてきたデータを基に、容疑者を20人まで絞り込むことが出来ました。もっともその人間が、そのバックの下っ端だという可能性は否定できませんが。一応ファイル化しておきましたので、今すぐ送りましょうか？」

《そうだな。今すぐ私の携帯に送ってくれ》

「分かりました」

剣崎はそのファイルの文章を、一定の法則で文字を変化・省略・追加するという古典的且つ効果的な暗号作成ソフト——涼月が作成したもの——に掛け、その文章を入れたファイルをメールに添付し、課長の持つている携帯のアドレスに送信した。

すぐに画面に映っている課長の懷で着信を告げるアラーム音が鳴り、課長は懷から名刺大の大きさの高機能携帯を取り出して言った。《今届いた。ところで、いつも遅くまで寝ている朝霧はいいとして、涼月はどうした？》

「一番遅くまで捜査していたようなので、まだ寝ていますけど」

《そうか。以前アイツに送らせたメールに、どういう訳か——いや、そもそも私が最初にやったんだっただか——新種のコンピュータウイルスが仕込んであったからな。どうやら今回はそれを考えなくて済むようだ》

そう言うのと課長は携帯を開き、そのファイルを開いて内容を確認し始めた。もちろんその文は暗号文だからそのままではまともに読めないため、暗号解読ソフト——これもやはり涼月が制作したもの——を使い、元の文章に変換しながら読んでいるらしい。

《大体確認した。ご苦労》

服を着替えた朝霧がオフィスにやって来るのとはほぼ同時に、とりあえず一通り読み終えた課長は顔を上げて言った。

《では、昨日の一件に関する統括理事会からの評価だが——まあ問題は無いということだ。ただし、取り逃がした男の正体は早く突き止めるように》

「わかりました。ところで、今日の予定はどうなっているんでしょうか？」

《その件だが、君達は今日から正式な部隊として認められたため、場所を移してもらおう》

「はあ。統括理事会直属の部隊が、公の場に姿を現していいんですかね？」

《当然だ。いくら事実上の自治区となつている新東京とはいえ、いつまでも隠しておくわけにもいかないし、君達の社会復帰のためにも必要だろう》

「ということは、警察お抱えの機動隊にでもなるつてことですか？」
《まあそんなところだが、君達は新聞やテレビのニュースを見ているかな？》

「し・ん・ぶ・ん？」——なぜかその単語を呟いて目を丸くする朝霧。

「……一通りは見ますが——若干呆れたような視線を朝霧に向ける剣崎。

「ペーパーの新聞までチェックしてませんが、一応は」——朝霧に同情するような顔の不知火。

《では、最近日本国政府が設立することを決定した「日本情報局保安部」——通称？NSS？という情報機関を知っているかな？》

「知ってますよ。MISの焼き回しだとか言われているヤツでしょう？予算の無駄だと散々マスコミから叩かれているようですけど」

《そう。そのNSSだ。君達？エレメンツ？には、その一員として働いてもらう。主な任務は、君達や他のメンバーが持つ禁忌の力を最大限発揮し、同じ「禁じられた技術」を持つ犯罪者を迅速に、且つ積極的に取り締まることだ》

「この町で「禁じられた技術」を扱ってもよいのは我々だけだと聞いていましたが？」

《ああ、MSSのメンバーはそういった技術に偶然関わってしまった人間で構成されているということだ。例えば、君達を改造した博士もNSSの一員として働いてもらうことを予定している》

「なるほど、そういう人がNSSのメンバーになるわけですか」

《まあ、そういうことになるか。後はまあ、私がそこら辺から適当に引き抜いた人間だな。ああそうそう、もちろんそのNSSの新東

京支部代表は私が兼任するので、引き続きよろしく頼む》

「マジですか!？」

「……自分は何も言いません」

「ボクは誰でもいいです」

《……囁むな》

各々微妙な反応を示す面々に、課長は思わず苦笑した。

そして通話が終わり、まだ眠っていた涼月を起こして、適当に冷蔵庫の中の物を食べていたところで、再びオフィスのテレビ電話が鳴った——午前九時ノ剣崎は電話に出た。

「諸君、長らくお待たせした」

わざとらしい、もったいぶったような声。

「引き籠もり生活は慣れたかな?しかしそんな退屈な日も終わりだ。仮初めの隠れ家を捨て、いざ太陽の下へ!下に小洒落たタクシーが用意してあるから、それに乗りたまえ」

課長からの連絡——表舞台へ。

第六話（前書き）

珍しく一週間以内に更新しました。

第六話

4人は装備を整え、オフィスを出ると、いつの間にか下に停められていた自動操縦機構オートパイロットシステムが取り付けられた黒いワゴン車に乗った。

そして乗ること十分。

「ここかー」誰よりも早く車から飛び降り、大きく伸びをする朝霧と、

「まあ、ここが一番便利と言えば便利だろう」それを追って降りる剣崎。

それを追って車を降りた不知火&涼月を合わせた4人の正面には、このコンクリートの浮島で造られた海上都市「新東京」のちょうど中心に位置する、横2000メートル、高さ2000メートル、高さ3000メートルの超巨大ビルがそびえ立っていた。

その頂上に広がる巨大テーマパークと、ビルの外部に張り出している道路によって太い螺子のような外見をしている、新東京に在住しているおよそ500万人の人口の内、実にその三分の一が居住しているモンスターハウス。

「これだけ広いなら、怪しい場所とかいっぱいあるんでしょ？」朝霧はあまりに巨大過ぎるビルを見上げながら、剣崎に尋ねてきた。

「さあな。プライバシーの問題で、監視カメラの類はあまり設置されていないと聞くが」剣崎は朝霧を真似てビルを見上げた。もちろんこの位置ではビルの頂上はおろか、その半分も見えない。

「それはいいとして、とりあえずメインゲート付近には誰も見えておられないようですけど、どうすればいいんでしょうか？」涼月は朝霧と一緒に上を向いている剣崎に、声を掛けてきた。

「……そこまでは聞いていないな。こっちから着きましたと連絡を入れるか」剣崎は地上に視線を戻し、ポケットの中から携帯電話を取り出した。

「そつえば不知火さん、貴女の目では見えないんですか？」

「窓のある部屋なら結構見えるんだけどね。今のところそれっぽい場所は見えない。ひーちゃんこそ、さっきの電波の発信源を特定できないの?」

「……うるさいですね。日頃から人の部屋を覗き見してるのなら、こういう時くらい役に立ったらどうなんですか?」

「おい、後ろで喧嘩をするな。いや、今何か妙な単語を聞いたような……?」

「別に隣は気になくていいよ。どうせ翡翠のことだろうし」

「ん? ああ、そういう変態さんか……今の今まで全く知らなかった……」

「じゃあ、瑠璃がどうして毎日早起きしているのか知ってる?」

「まさか……涼月の寝顔を見るためとか……」

「残念ながら、正解よ」朝霧はそう言くと、腕組みをしながら神妙な顔をした。

「なるほど……そういうえば今朝も自分が起こしに行きたいとか言ってたな……」

「隣君にもバレたか……だったら仕方ない。そう、ボクとひーちゃんは相思相愛で——」そういう流れにしてしまおうとする不知火の戯言を、

「違います」即座にピシャツと撥ねのけた涼月。

「あつ、ひどーい」

「ひどくないです」

二人はお互いに口論し合いながら、突如掴み合いを始めた。

「……ともかく、二人とも分からないんだな? だったらこつちから連絡を……っと、向こうからメールが来た」

「で、どこつて?」

「地下だ。地下13階の1313号室。これはいちいち面倒だな……外に出やすい1階に事務所を置くのが合理的だと思うんだけどな」
「そうでもないと思います。このビルの地下は、今見えている地上部分よりもさらに広く、外に繋がる抜け道もそこら中にあるため、

この町で最も治安が悪い場所です。そういう意味では、そのど真ん中に事務所を構えるのは合理的なのかもしれません」

「どれくらい治安が悪いんだ？」

「それなりに。麻薬や売春は当然として、時には銃弾が飛び交うこともあるそうです。昨日捕獲した銀行強盗のグループも、元々ここで群れていた不良集団のようですし」

「それは酷いな。で、3人とも何か武器は持ってきているのか？俺はいつもの装備一式くらいは持ってきているが」

「私の武器は毎回支給されるから何も。まあ、別に私は殴る蹴るでも十分でしょ？」朝霧はそう言っていると、両手を腰に当てた。

「確かに。で、後ろの二人は？」その様子を見て頷くと、後ろで掴み合いをしていた涼月と不知火の二人に声を掛けた。

「……すいません。丸腰です」突然シユンとなり、その隙を突いた不知火に羽交い絞めされながら、涼月は申し訳なさそうに答えた。

「ボクは一応拳銃があるけどねー」

一方そんな涼月に羽交い絞めを決め、そのまま両手でセクハラ行為を始めた不知火は、剣崎に右太腿のホルスターに収めた拳銃をアピールした。

「まあ、拳銃があるなら問題ないな。このまま行こう」クールに決め、メイニングートに向かおうとした剣崎の後ろで、

「わかった！ひーちゃんはボクが守る！」涼月の胸を揉みながら返事をした不知火と、

「ちよつと……どつちか代わって下さいっ！」その行為に悲鳴を上げる涼月。

「……目立ち過ぎだ」

剣崎はその光景を目撃した周りからの生暖かい視線を受け、思わず頭を抱えた。

そして4人は人通りの多いメイニングートを抜けると、入ってすぐの場所にいくつも設置されている、下りのエレベーターを待った。

このビルのエレベーターは混雑を避けるため、エレベーター毎に上りか下りかがあらかじめ決められており、乗客は自分がどの階に行くのかで、エレベーターを選ぶ必要がある。もちろん正しいエレベーターに乗ってしまえば、後は目的階のボタンを押せばいいだけだが、もしも間違ったエレベーターに乗ってしまった場合は、たとえば他の乗客が乗っていなかったとしても目的の階に行くことが出来ないという、いわば電車やバスのような運行システムになっている。そして数分間後、下りのエレベーターの一つが開いた。その中からは会社へ向かうと思われる無数のサラリーマン達が凄まじい勢いで我先に、我先にと降りてきた。

その急流をやり過ぐすこと約10秒後、降りたのを見計らって、4人はエレベーターに乗り込んだ。

一階でほとんどの人間が降りたエレベーター内は、その小さな路線電車程もあるエレベーター自体の大きさも相まって、とたんに閑散とした雰囲気になっていた。

そして地下2階、3階と連続で停まって中に残っていた数人も全員降り、4人だけになったところで剣崎は口を開いた。

「しかしまあ、ちょっと降り過ぎだな。一応地下にも色々施設はあるんだろ？」

剣崎は嫌そうな顔をしながら、他人にバレないようにあえて押していなかった、何故かチューイングが一面にこびり付いている地下13階のボタンを押し、エレベーターの壁に背中を預けながら言った。

「そういったところは、ほとんど地下に住んでいる住民で構成されているらしいです」

剣崎の隣で同じく壁に背中を預けている涼月は、両手に持ったタブレットコンピューターの通信状況を確認しながら返した。カモフラージュのため、4人はそれぞれ地下3・4・5・6階のボタンを押していたため、時間にはまだ余裕がある。

「なるほど。しかしさっきから思っていたが、わざわざ治安の悪い

地下に住む理由は何なんだ？まだ上から通った方がマシだと思うが」
「色々あると思いますが、まずは安さではないでしょうか。土地代や家賃が安いのはもちろん、水道代や物価まで違うらしいです」
「……土地代と家賃はまだ分かる。しかし何故水道代や物価まで違うんだ？」

「地下では構造上の問題で、あまりきちんとした水道設備が整っていないらしく、地下で使われている水道では、浄水場から流れてくる排水が流れているらしいです」

「おいおい、大丈夫なのか、それ？」

「一応その水は、工業用水としての基準値はかろうじてクリアしていたため、元々は地下の工業地区に流すだけの予定だったらしいんですが、実際に運用し始めてから水質調査をしてみると、どういうわけか水質上問題が無かったため、結局一般家庭でも使用できるようになったそうです。しかし現実きちんとした設備が整っているわけではないため、水道代は通常の半分以上になっているそうです」
「じゃあ物価が違うのは、他にもそういう類の代用品が出回っているってことか」

「恐らくは。それともう一つ、本来新東京で行うはずだった計画の一つに組み込まれていたらしいのですが、諸外国からの圧力で結局使われることなく眠っていた各種再利用機が横流しされているようです。核融合炉の成功で、実質的に電気が使い放題になっているこの町の欠陥を上手く突いたものかと」

「しかしそこまで分かっている、どうして警察は何もしないんだ？」

「分かりませんが、おそらくは上からの圧力かと」

「またそれか。しかしそう考えれば、俺達が地下に配置されることにも合点がいく」

「と言つと？」

「簡単に言えば――」

剣崎が答えようとしたその時、暇を持て余したような顔をしてエレベーターの中央で突っ立っていた朝霧が、壁際で熱心に話し込ん

でいた二人の会話に突如割り込んできた。

「上を仕切っている人間が違うんでしょ？アメリカ映画のFBIと警察の関係、みたいな感じで」

「……聞いていたのか？」意外そうな顔を浮かべる剣崎と、

「そうなんですか？」その剣崎に確認を取ろうとする涼月。

「なんか私を馬鹿にしてない？」その様子を見て、朝霧は頬を膨らませて剣崎に詰め寄ってきた。

剣崎はふくれっ面になった朝霧を適当にあしらいながら、点灯したB―13のライトを見て言った。

「いや、そのイメージは大体合ってるが――到着だ」

その声とともに、地下13階に到達したエレベーターのドアが開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7955w/>

機械化クロニクル(改題)

2011年10月19日02時12分発行